

岩井橋

いわいばし

名古屋城の建設にはじまる慶長以来の歴史をもつ名古屋市民にとって、関場茂樹の設計によって大正12年（1923）9月に竣工した岩井橋は、あまり記憶に残らない橋のようだ。竣工当時の橋の写真やその後の写真もみつからない。しかし橋そのものは、ひじょうに興味深い。橋の側面には、飾り板がつけられているのである。

明治大正期を通じて、このような飾り板のある橋はひじょうに限られている。東京でいえば、皇居の二重橋（No.9）が最初であり、その後、新橋（32年）・江戸橋（34年）・京橋（34年）とつづく。しかし現在わかっているところでは、明治36年（1903）にかけられた万世橋を最後に東京では、プツンと途絶えてしまう。

“橋の都”ともいわれる大阪では、この種の橋はなぜかかけられていない。しかし名古屋市では、岩井橋と納屋橋の2橋が確認されている。橋の創架が江戸時代にさかのぼる納屋橋は、大正2年、飾り板のある橋に架けかえられた。岩井橋より10年早い。だがその分早く架けかえられ、桁橋になってしまった。それでも旧橋の外観だけは復元されている。したがって岩井橋は現存する戦前の橋として、飾り板を有するわが国唯一の橋梁なのである。

突然思い出したかのように名古屋に登場した飾り板の橋だが、装飾やデザインは、大正という時代を反映している。東京の飾り板の装飾は、龍や花唐草のように、いずれも和風だが、納屋橋や岩井橋のそれは、装飾が全体的におさえられた西洋風である。また岩井橋の竣工が納屋橋より10年遅い分、違いもみられ、装飾はより簡素化されている。納屋橋のクラシックに対し、岩井橋は近代なのである。アーチ・リブの上に小さな飾りアーチを連続させ、飾りアーチのリブには、主桁にあわせてつば（フランジ）が出っぱり、その端部はクルクルッと渦巻状をなす。竣工当時は、高欄の上に3本の青銅製の電飾灯があり、大きな親柱の上にはひとときわ立派な青銅製の電飾灯が設置されていた。

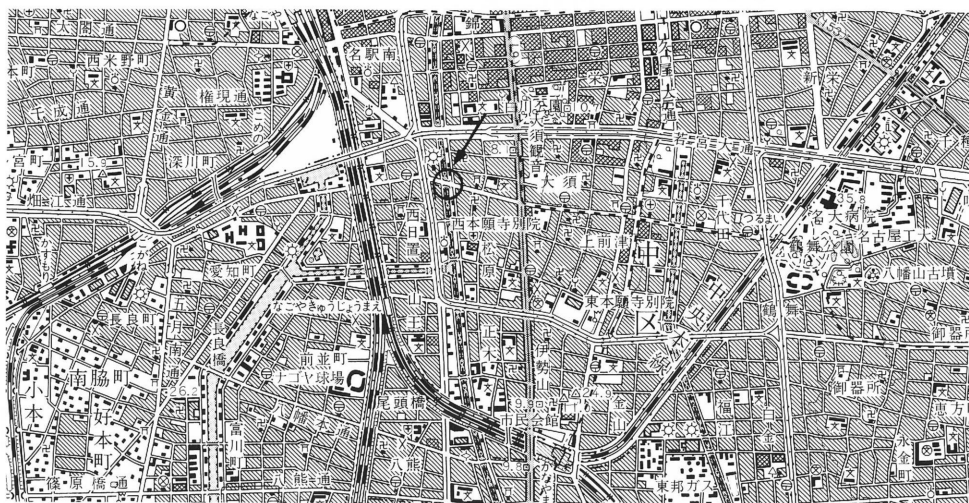
このような華やかな橋が、なぜ名古屋のこの地に架設されたのであろうか。

名古屋の近代都市計画は、大正8年の五大幹線道路の開設にはじまる。このときの第1号線に指定されたのが、岩井橋のかかる現在の岩井町線で、明治43年（1910）開催の中京博覧会（第10回関西府県連合共進会）の会場になった鶴舞公園の正門へとつながっていた。幅員は18間（32.7m）と、5本の街路の中では一番の広幅員である。

鶴舞公園は、名古屋市が設置した最初の公園であり、博覧会の終了後、本格的な造園工事がはじまった。大正9年（1920）頃には近世フランス式の洋風庭園と回遊式の日本庭園をあわせもつ和洋折衷の大公園がほぼ完成した。公園の全体計画は、東京の日比谷公園を設計した本多静六がかかわっている。

第1号線は、近代的な大公園にまっすぐつらなる広幅員街路として計画された。橋もまたそれにふさわしく、名古屋市の近代を象徴するものでなければならなかった。〔IT〕

竣工年月：大正12（1923）年9月
 所在地：名古屋市中区
 河川名：堀川
 橋長・幅員：30.0m×29.5m（車道21.9m+歩道2×3.8m）
 径間数・支間長：1×29.7m
 形式：上路ソリッドリブアーチ



(1:50,000 名古屋南部)



〈1994年4月30日，撮影・共に伊東 孝〉



親柱に比べて，現在は小さな橋灯がついている。